第三百九十五回　青葉会

平成三十一年三月二十八日（木）午后一時半～四時半　文京区民センター会議室

〈選者〉◎川口孤舟

〈出席者〉今井紀久男　大林猛　川口孤舟　久米五郎太　小西弘子　豊田ゆたか　中野一灯
山内天牛
伊賀山そらお　柿崎忠彦　小早健介　朱牟田恵洲　土谷堂哉　古田昇　宮内規雄
山崎亜也　山田けい子　渡邊盛雄

〈投句〉赤田堅　楠田彦十　在間千恵　庄司龍平　高橋敏郎　早川允章　福島正明
星田啓子　松崎浩　村田くに子　山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

九点
風まぶし三陸鉄道復旧す　紀久男（堅・彦・弘・敏・ゆ・正・浩・く・天）
（風まぶしは風光るの傍題）

七点
◎春光をまとひて風の丘に立つ　ゆたか（孤・千・灯・允・啓・浩・く）
黄水仙昏れてなほある水明り　孤舟（堅・ゆ・灯・敏・正・允）

六点
子燕の膨らむ喉や朝日影　仝（ゆ・啓・浩・天・三）

五点
◎縁ある人のまた消ゆ春時雨　五郎太（堅・紀・孤・正・く）
◎万歩計千歩に満たず春眠し　健介（猛・孤・千・敏・く）
◎また一人島を離るる卒業子　昇（猛・孤・ゆ・灯・允）

四点
巻尺のつるんと戻る日永かな　孤舟（彦・弘・ゆ・灯）
濡れ縁の俄床屋やうららけし　仝（弘・正・浩・天）
春疾風そっと手と手の老二人　けい子（猛・五・千・啓）
城登れば町の彼方に春の海　（小田原城）　そらお（彦・千・天）

三点
◎仕舞うのは少し待とうか母の雛　忠彦（紀・孤・彦）
銀輪の列如月の風となる　孤舟（灯・允・啓）
（見事な句ですが類想句ありそう）
朧夜や弁天小僧の決め科白　弘子（紀・敏・啓）
三月歌舞伎座「雷船頭」
春の夜をいなせに踊る幸四郎　仝（灯・正・天）
◎おぼろなる沖過ぎゆけり油送船　一灯（孤・弘・三）
天蓋の星に照らされ野に遊ぶ　昇（堅・啓・浩）
大鉢の植木も傾ぐ春一番　天牛（五・千・龍）
椶の芽や木曽路に残す若き日々　盛雄（堅・紀・ゆ）
錦絵の中へ春の貴景勝　仝（紀・五・敏）

二点
連れ立ちて長寿姉妹の彼岸入　紀久男（く・三）
（仲の良い妹の訃報にショック死）
上方（かみがた）より春告魚の釘煮かな　仝（堅・天）
（”春告魚”は季語でないのを承知で
敢へて句に鮠子（いかなご））
白内障見るものすべて朧かな　忠彦（紀・五）
草餅の青さにひかれ両の手に　猛（紀・天）
春一日スワンの恋を読み了えし　五郎太（龍・正）
筑波嶺の青木影なり遠霞　弘子（五・允）
◎揺る波に舟浮かべたや雪柳　健介（孤・天）
卒業すエースで四番神妙に　恵洲（彦・弘）
老妻の復習（さら）ふトレモロ春セーター　堂哉（紀・三）
◎強東風の裾を気遣ふモデルかな　仝（孤・龍）

二点

沢水に口漱ぐとき呼子鳥　一灯（弘・三）

◎南風に乾しあり海士の潜水着　仝（孤・天）

薄氷の如きショパンのピアノ聞く　規雄（敏・允）

紫木蓮花びら解けしどけなく　亜也（紀・猛）

蕗のとう土井さん風の天ぷらに　天牛（紀・三）

恰好よき突きの大関春一番　盛雄（紀・猛）

満開を待てぬ花見の列続く　（新宿御苑）　そらお（紀）

一点

暁斎絵のおどろおどろし春の宵　紀久男（く）

（サントリー美術館の河鍋暁斎展）

新内きき牡蠣ざんまいのご馳走に　仝（天）

春一番オレオレ詐欺の電話受け　忠彦（紀）

あらうれし結露なき朝春分や　猛（龍）

緑地帯ピンクに染めん花七分　仝（千）

◎垣根よりアピールするや雪柳　仝（孤）

菜の花や「妙」一字のお軸あり　五郎太（三）

鳥雲や知らぬ間に友寡婦にして　弘子（紀）

大道芸拙きも居てうららけし　恵洲（龍）

春の富士三保の松原舞ふかもめ　ゆたか（浩）

鶯の去りて林が造成地　仝（紀）

咲く花や人それぞれの花の影　仝（五）

◎墨堤へ船笛一声花の雲　一灯（孤）

口笛の擦るる破調春愁ひ　仝（彦）

木蓮の白に銹（さび）出で時とまる　亜也（紀）

本借りに行けば偶々花八分　天牛（龍）

＊　＊　＊　＊　＊

●次回青葉会

四月二十五日（木）　午后一時半～四時半　文京区民センター　会議室

当季雑詠五句　投句二句

年会費（一万円）集めます。

以上文責　紀久男

平成三十一年三月青葉会報

一今回は天牛さん以下８名出席。投句９名。猛さんの司会でご覧のようにゆたかさん、孤舟選者、小生が好成績でした。　弘子さん寄贈の京銘菓「阿闍梨餅」、孤舟さんの生酒「菊水」（新潟）、小生の純吟「雪椿」とビール、おかきを賞味し乍ら、快調に進行。　白内障で欠席の忠彦さんのこと、そして句の解釈を巡って談論風発。　回覧は、①「爽樹」３月号、②真希子さんから万里子先生の近況と選句のＦＡＸ、③社友会ＨＰ掲載の盛雄さんの「俳句との出会い」と龍平さんの「カサブランカ」そして長谷見敏さんの「旅のメモ」海外雑詠、④荻原宏信さん（Ｓ３６年入社、宝塚在住）の絵葉書（俳句４句）、⑤「無名会」堅さん、龍平さんら七名の写真と「きさらぎ」初句会のスナップ３枚。

二　関係者近詠

学ぶ地の訛りで演ず聖夜劇　眞希子
四つ目の年号も生きなむ大旦　〃
賀状のみの長生きを今年で打ち止めて　〃
喰積の煮崩れ焦げが家の味　〃
二人なり初湯を夫に譲られて　〃
小六月三越好きも父譲り　弘子
お隣りのピアノ訥々冬休み　〃
今晩はなどと焚火へ入りけり　〃
白富士の思はぬ近さ初句会　〃
つい声を荒げし自虐去年今年　青史
あらためて幾久しく屠蘇祝ふ　〃
病む妻の声なき哄笑福笑い　〃
初夢は嬉しかりけり黙すべし　〃
初春の成田屋一家舞へるかな　紀久男

―「森の座」―　四月号

岬鼻に風待つ鷹のありにけり　孤舟
人情の炊き込まれゐるおでん鍋　〃
語部の訛りやはらか囲炉裏端　〃
町屋より筬音漏るる雁木かな　〃
短日や象舎に象の影もなし　〃
暖簾より臀をはみ出し夜鷹蕎麦　〃
鳰浮かび夕日まみれのシルエット　〃

―「爽樹」―　三月号（ウェブ俳句通信）

働かざる証（アカシ）皺なき吾が手　恵洲

―「ＮＨＫ俳句」４月号　西村和子選

小春日の風に押されて又歩く　規雄
句友との挨拶楽し初芝居　〃
真青なる空わが身なり梅開く　〃

―「ＮＨＫ俳句」１月・３月・４月号

虫しぐれ中に指揮者のゐるらしく　孤舟
大花野空のすとんと抜けてゐる　〃
能面の照りや曇りや十三夜　〃
木守柿ぽつん夕日の忘れもの　〃
落葉掃く人も落葉の色となり　〃

―「爽樹」―　三月号

湖絶景ふぶくさくらの長浜城　盛雄
青春も残りの日々も桜かな　〃
愛飲の地酒少々木の芽和　健介
春雨や荷風の世界に時忘る　〃
ポトマック河畔の花の便り待つ　〃
いまさらに行基の事蹟花と咲く　〃
地酒酌み好句できさう木の芽和（あえ）　紀久男
梅見頃我が青春の北新地　〃
被曝者も交じへ団地の花見かな　〃
冴返る仁左の盛綱大入りに　正明
壊れ易き地球は宇宙のシャボン玉　〃
野の菫忘れかけてる己が幸　允章
辛夷咲いて空の青さを際立たす　〃
鶯のこゑを遠くにまた眠る　〃
満開の花の上なる天守閣　〃
城垣の裾をゆらせて諸葛菜　〃
ウォーキング逸れて摘みとり蕗のとう　荻原宏信
川広く寒禽徒らに集散す　〃
歌劇場近き岸辺の鴨沈黙す　〃
不誠実尾を見せ潜る鳰（かひつぶり）　〃
ぼんやりとした月の出やお中日　彦十
花冷えやくぐもる鐘の音上野山　〃
病室より生還寒けれど我家　千恵
園遊会春の土産は金平糖　〃

平成三十一年四月二十日

紀久男記